

通時的構文文法における交替現象について

英語の所格交替を例に

石崎 保明（南山大学）

1. はじめに

交替 (alternation) は派生による接近法において活発に議論されてきた現象であるが、派生を採用しないはずの構文文法理論 (CxG) でも交替 (形) という用語が使われることがある。本稿では、(1)に例示される所格交替 (locative alternation) に関わる 2 つの構文、つまり場所目的語構文 (1a、以下、場所構文) と物材目的語構文 (1b、以下、物材構文) を例に、交替現象の通時的発達を考える。具体的には、これら 2 つの構文は通時的にはそれぞれが異なる構文ファミリー内で発達した別の構文であるが、後期近代英語期 (LModE) 以降、歴史的発達の過程で双方が同じ動詞を共有するようになり、特に場所構文においては受動構文から能動構文への拡張的に使用されることで現代英語 (PDE) ではあたかも 2 つの構文が“交替”しているように見える状況になっているということを示す。

- (1) a. Pat loaded the truck with hay. (場所 (目的語) 構文)
- b. Pat loaded hay onto the truck. (物材 (目的語) 構文)

2. 構文文法による“交替”現象

“交替”するとされる 2 つの構文に関して、Goldberg (1995, 2002) はたまたま意味こそ似ているが言語ネットワークとしてはかなり遠い位置に置かれる無関係の構文ペアと考えている。他方 Cappelle (2006) や Perek (2015) は CxG の基本理念を Goldberg と共有しつつも、交替関係にあるとされる構文間の意味上の類似性もまた私たち人間が持っている言語知識を反映したものであると主張している。Cappelle らは 2 つの交替形を異構文 (allostruction) として結び付けこれが上位に指定されるスキーマ的な構文の下位に位置づけられる形で言語ネットワークを構成するという考え方を提案している。Goldberg の分析とこの異構文分析との違いを端的に言えば、前者は形式を重視したネットワークの階層的な構文関係を重視することで“交替”に関わる 2 つの構文は別の構文ファミリーに属している別構文と見なすのに対して、後者は水平的な構文関係を重視することでそこに意味の類似性があれば所属する構文ファミリーを超えた形でネットワークを構成することがありうると考える。

言語知識の重層性を考慮すると両者は必ずしも対立しておらず理論的な共存が不可能なわけではないものの通時研究の上で異構文分析が問題となるのは、異構文分析では形式の類似性が無視され、純粋に意味の観点から異構文を認定するということである。書き言葉のみを手がかりに観察していく通時研究では、どの構文とどの構文とが異構文の関係にあるのか、さらには構文ペアの異構文性 (allostruction-hood) を認定することが難しい。PDE でいえば、「動詞—不変化詞」構文の交替は同じ動詞・参与者役割・不変化詞を使用しかつ情報構造上の交替もあるので異構文性が最も高いペアである。与格交替のペアも形式上は異なるものの同じ参与者役割を用いており情報構造による交替もあることから、「動詞—不変化詞」構文交替のペアほどではないものの、異構文性が比較的高いといってよい。PDE の所格交替はどうかというと、2 つのペアは[動作主][場所][物材]など同一の参与者役割を共有しているものの生起する前置詞が異なり情報構造にともなう交替もないことから両者の異構文性は高くない。このように、(1a)と(1b)は明確に異なる出来事を描写している構文であるということ考えることができ、同じ参与者役割を用いているという理由だけで異構文としてまとめることの意義が乏しい。

3. 後期近代英語以降における所格交替に関わる構文の発達

PDE において 2 つの構文の両方に生起する英語の動詞クラスである[積み込み (e.g. load)] [塗り込み (e.g. smear)] [詰め込み (e.g. cram)] [積み上げ (e.g. heap)] [放出 (e.g. sprinkle)] の各クラスに対する代表事例として各々の () 内の動詞の使用状況を CLMET (Corpus of Late Modern English Texts) と BNC (British National Corpus) を使って調査した。実際に使用される構文体 (construct) には複数の構文から継承されていること、および筆者の過去の研究を踏まえ、本稿では (1) で示した 2 つの所格交替構文 (前置詞句の省略事例を含む) と能動構文/受動構文の分布を調査した。

まず、動詞 load の通時的分布に関しては、(i) LModE では場所構文での使用が顕著で物材構文内での使用が少ない、(ii) 場所構文では受動構文での使用が比較的多い、(iii) PDE では物材構文内での使用も増え LModE に見られた両構文の非対称性がかなり解消されている、といった特徴がある。動詞 smear の通時的発達には、(i) LModE の後期になって徐々に使われ始めた、(ii) LModE では場所構文では受動構文での使用が比較的多

く、物材構文では受動構文内での使用がない、(iii) PDE では両構文内の使用に対する非対称性がみられない、といった事実が観察される。動詞 **cram** を含む構文の通時的分布には、(i) LModE は場所構文での使用が多いものの物材構文内での使用も早くからみられる、(ii) PDE では両構文内の使用に対する非対称性はみられない、といった特徴がある。動詞 **heap** には、(i) LModE 以降、一貫して物材構文内での使用が比較的多い、(ii) 物材構文では能動構文と受動構文での使用がほぼ同じ頻度である、といった特徴がみられる。最後に動詞 **sprinkle** は、LModE 以降、両構文内でバランスよく用いられている。

4. 考察

PDE の分布のみを見ていると、今回調査した動詞は、**heap** を除き、場所構文と物材構文のいずれの構文にもバランスよく使われている。この状況は一見したところこれらの動詞が自由に所格交替を起こしているように見える。しかしながら LModE には (2) に示される傾向が観察される。

(2) 後期近代英語期 (LModE) での動詞の使用状況：

- a. 場所構文での使用が優勢：load、smear、(cram)
- b. 物材構文での使用が優勢：heap
- c. どちらの構文もバランスよく使用：sprinkle、(cram)

この状況を通時的構文文法 (DCxG) の視点から捉えると、場所構文と物材構文は、もともとはそれぞれが若干異なるタイミングで同一の動詞を巻き込みながら徐々に拡張・発達し、PDE になると同じ動詞がどちらの構文にも利用可能になっており、あたかも自由な“交替”を示しているような状況に至ったと考えられる。このことに加えて、両構文は態 (Voice) に関する構文選択において差異がある。受動構文内での使用が比較的多いのは load、smear、cram であるが、これらの動詞はすべて LModE では場所構文での使用が優勢な動詞でもある。つまり、場所構文はもとより受動構文と密接な関係にあり、受動構文で使われる場合、場所句は「ある行為の結果としての状態」を表わし、[with+物材]句が、その具体的な状態を描写している。

他方、よく知られるように、PDE の場所構文が能動構文として使われる場合には「全体性の解釈」の有無がしばしば問題となり、その解釈の存在が物材構文との大きな違いであると指摘される。この全体性の解釈は、受動構文内で[場所]句が[物材]を明示する with 句と共に起することで表わしていた「行為の結果として物材が置かれている場所」という意味が、能動構文内でも使用されることで「結果」から「行為」にプロファイルシフトし、[場所]句が「ある行為の結果の状態」から「ある行為の対象」と捉えられ、そこに他動詞構文ファミリーのプロトタイプ的な特徴である「動作主性」と「他動性 (ないしは影響性)」が継承されることで「全体性の解釈」が出てきたものと考えられる。

物材構文については、場所構文に見られるような受動構文との関係性が認められず、このことも、2つの構文が独立した発達を遂げてきたことを示唆している。また、物材構文は、LModE 以降、それが所属している構文ファミリーの特徴である「使役移動」に焦点を当てた構文であり続けてきたといえる。つまり、物材構文における[場所]は LModE 以降、常に「[物材]の移動先としての[場所]」を描写してきたといえる。

まとめると、PDE における両構文は、それらが属している構文ファミリーの特徴を継承した形で発達しており、Goldberg が提案している形式を重視した構文ファミリーの階層的ネットワークが LModE 以降の所格交替の状況をうまく捉えていると考えられる。

5. おわりに

今回調査した5つの動詞は、PDE での分布のみを見ていると確かに“交替”しているようにも見えるが、そのように至った経緯は一律ではない。DCxG の視点でそれらの発達を捉えると、所格交替に関わる場所構文と物材構文は、本来はそれぞれが異なる構文ネットワークの中で独立して発達したものであるが、LModE 以降、同じ動詞をわずかに異なるタイミングで取り込みながら発達してきたことにより、PDE ではあたかも“交替”が起こっているように見える状況になったと主張した。

References (Selected)

- Cappelle, Bert (2006) “Particle Placement and the Case for ‘Allostructions,’” *Constructions* 1, 1–28. Goldberg, Adele E (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago. Goldberg, Adele E (2002) “Surface generalizations: An alternative to alternations,” *Cognitive Linguistics* 13 (4), 327–356. Perek, Florent (2015) *Argument Structure in Usage-Based Construction Grammar: Experimental and Corpus-Based Perspective*, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.